温泉街の放浪者

放射朗

今どき部屋にトイレのない旅館なんてあまりないのではないだろうか。ぶつぶつ文句いいながら、俺はドアを開けると廊下の先にある共同トイレに向かった。
それほど飲んだつもりはないのに、今日はやけに酔いが早いようだ。ふかふかのじゅうたんの上を歩いているようで、油断しているとバランスを崩して床に寝てしまいそうだ。

高校時代の友人達から、泊りがけで同窓会をしないかと、お誘いのメールが来たのが一ヶ月前のことだった。
最初はあまり気乗りがしなかった。それほど親しい友人というわけでもなかったし、どちらかというと嫌な想い出しか残ってなかったからだ。一度は断ったが、しつこく言ってくるので根負けして、結局参加する事になった。
俺を含めた八人の男達が、十二畳の和室で十二年ぶりの旧交を温めた。おまえ太ったなとか、だいぶ頭も薄くなってきてさーとか、酒が進むに連れて、屈託ない会話がやっとはずみだした。

でも俺達皆おまえにはよくいじめられたよなあ、と快活に言う瀬崎の顔は、しかし笑っていなかった。殴られるんじゃないかと一瞬怖くなったくらいだ。
すぐに笑顔に戻った瀬崎は、まあ飲めよと俺のコップにビールを勢いよく注いだ。既婚者が5人で独身者が俺を入れて3人だった。
一昔前と比べても男の平均初婚年齢が上がってるから、まだ独身でも焦る事はないなどと、ピントの外れた慰め方をしたのが阿部だ。

俺は、まだ結婚なんてして縛られたくないんだよ、自由に女と恋愛したいんだ。
そう言う俺を、阿部は薄ら笑いで見ていた。
こいつは昔からそうだった。よく阿部を使いっぱしりに使ったものだ。タバコ買ってこいと言われても、次の授業に遅れるとわかっていながらへらへらして買いに走っていた。俺に逆らう事はとてもじゃないが考えられないようだった。
それほど彼に恐怖心を抱かせるような事をした覚えはないが、ひょっとしたら俺が忘れてしまっただけなのかもしれない。

トイレはなかなか見つからなかった。
部屋に通される時、女性の従業員から案内されていたはずなのに、思い出せなかった。ベージュ色の廊下をよたよた歩いていると、やっとそれらしい入り口が見えてきた。
ずいぶん歩いたような気がするのはかなり酔っている証拠かもしれないな。
最近、昔と比べて大分酒が弱くなった気がする。少し押さえないといけないな。薄っぺらい木の扉を開いてトイレに入った。
右側に個室が二つ、左側に小便器が三つ並んでいた。
独特のトイレ臭が鼻につく。消臭剤の刺激臭だ。俺は小便器に向かって、気持ちよく放尿した。
高校時代と比べて小便の出もゆるくなったもんだ。昔はあっという間に終わっていたのに、最近では出るまで一呼吸おいて、更に出終わるまでかなり待たないといけない。俺も年だなあ、などと考えていたら、個室の方からなにやら人の気配がしてきた。

人の気配がしても別段不思議な状況ではない。
先客に気づかなかっただけだと思おうとした時、その男の鼻息が妙に粗く聞こえだした。ふんふんと、まるで女と抱き合ってでもいるかのような、そんな色気じみた鼻息だったのだ。ひょっとして変態男女がこの中でよろしくやってる最中なのではないか？
旅館まで来て、トイレの個室でやらなくても良さそうなものだが、無理のない説明がすぐにいくつか思いついた。

たとえばグループで来た男女の中のカップルとか、まあいろいろと……。
好奇心がうずきだした。

すぐに俺はそのとなりの個室に魚のように音もなくすべり込んだ。
そおっと、足を上げて洋式便器に乗る。みしっという音に心臓が高鳴った。こそっと膝を伸ばして、個室を仕切る壁の上から隣の様子をうかがってみた。
立ちバックの状態で二人が愛しあっていた。二人とも全裸で汗まみれだ。後ろの男がぐいぐいと腰を前後させるたびに、フンフンという鼻息が荒く聞こえてくる。一瞬疑問符が俺の頭に持ち上がる。
鼻息は男のものだと感じていたからだ。
前の奴がこっちを振り向いた。ひげの濃い男の顔だった。
俺と目が合うと、その男はにやりと笑い、一緒にやるかいと訊いてきた。無言で俺は便器を降りると個室を出た。
男同士の愛の儀式に参加する趣味はない。
トイレを出ようとすると、入り口のドアのところに若い男が一人で立っていた。彼はズボンを下げて股間のものを露わにし、屹立したそれを俺によく見えるように擦り上げていた。
とろんとした目つきで、優しく笑っていた。
俺は彼を押しのけて廊下に出た。
彼が発射する前に横を通り抜けることが出来て、本当によかった。

酔いが一気に冷めるような事がおこったというのに、相変わらず俺の足取りは不確かだ。部屋に戻りながら、さっきのことを考えた。
この旅館、ひょっとしてその趣味の男達の秘密の溜まり場なのではないのだろうか。その愛好家達に言われるところの、発展場という場所だ。
そこに偶然俺達が泊り込むことになったというわけか？
いや、案外瀬崎たちは知っていてここを予約したのかもしれない。
高校時代のちょっとした仕返しに俺をびっくりさせようとして……。
部屋に帰ったら早速問い詰めてやる。

酔いと、先程の驚きとが絡まって、俺は高校時代の俺に戻っていくようだった。正直に言わなかったら殴って、更に蹴りまで入れてやろう。前歯の二本もぶち折ってやる。
興奮しながら廊下を歩いていると、先の方のネオンサインが目に飛び込んできた。たどり着いてみると、ＢＡＲサバンナの看板だった。
趣味の悪い名前に興味が湧いた。トイレに行く途中には無かったＢＡＲだ。
どこかで道を間違えたのだろう。
入ってみようと思ったのは、この店の従業員に部屋の場所を聞きたかったからだ。扉を押して薄暗い店内に入る。
テーブルが奥の方に並んでいる。割と広い店だった。
「いらっしゃいませ、カウンターとボックス席がございますがどちらになさいますか？」
ミニスカートから長い足をさらけ出したウエイトレスがにこやかに訊いてきた。
ボックス席と答えて、案内されるまま奥に向かう。
別に急いで部屋に戻る事も無い。すこし飲んで行こう。
すでに十分酔っているのに、なんだか喉が渇いていたのだ。

ふかふかのじゅうたんに足を取られて、よろけてしまった。
倒れこんだ俺は、誰かといきなり面と向かっていた。
死人のような目が、ほんの２０センチ向こうから俺を覗き込んでいる。よつんばいになった俺と向き合っているその目は、やはり生きてはいなかった。
目を上げると、その男の背中にはガラス板が這ってあり、その上にコップやらつまみの皿やらが並んでいた。
よつんばいの人形はテーブルだったのだ。
しかもその人形は裸だった。
昔、何かのＳＦ映画でこんな趣味の悪いテーブルを使った店が出てきたのを思い出した。

何の映画かは忘れたが……。
立ち上がって見回すと、テーブルはすべてよつんばいになった人形だった。
男と女が半々だ。すべて全裸で尻を突き出すようにしている。天板のガラスにスモークがかかっていたからすぐに気付かなかったのだ。
こちらにどうぞと案内されたテーブルは、運良く女のテーブルだった。

「お飲み物は何にいたしますか？」
席についた俺にウエイトレスが訊いた。
ビールと一言答えると、彼女は持っていたジョッキを、おもむろにテーブルの端、人形の股間に持っていった。何をしようとしてるのか？　俺は体をひねって覗き込む。
ウエイトレスが人形の尻をひとつ引っぱたいた。
ジョッキの中に人形の股間から勢いよく黄色い水流がほとばしり、泡を立てながらジョッキを満たし始めた。まさしく女がよつんばいで放尿している光景だった。
「はい、どうぞ。御代わりは自由ですから」
テーブルの上に大ジョッキが置かれた。ジョッキに水滴が張り付いてる所をみると、中の液体は良く冷えているようだ。その、多分ビールなんだろうと思われる液体は……。
恐る恐るジョッキを手に持った。
ずっしりとした重みのあるそれを口元に持っていく。
匂いを嗅いだら確かにビールの匂いがした。
変わった趣向に閉口しながらも、喉の乾いていた俺はそのビールを一口飲んでみた。ビールってこんな味だったかな？　ちょっとしょっぱいような気がするが、気のせいかもしれないし……。
飲んでるうちにうまいと思えてきた。俺は一気に飲み干すと、御代わりをするためにテーブルの尻にジョッキを持っていき、尻っぺたを一つ叩いてみた。
ぴしゃりというその音と、感触はまるで本物の女の尻を叩いたような感じだった。

ウエイトレスがした時と同じように、勢いよくあわ立つ水流が再びジョッキを満たし始める。しかし、今度は半分くらいで水流が止まってしまった。
俺は叩き方が弱かったのかと思い、少し強めに叩いてみた。反応が無い。
更に二度、三度と叩いてみた。
「ごめんなさい、もうカラッポなの。店の人に補充するように言ってください」
誰の声だ？
見回すが近くには誰もいない。ふと視線を落とすと、テーブルの人形がこちらを向いて気の毒そうな顔をしていた。
生きてるのか？　ジョッキを持つ手が震えたのだろう。ビールがこぼれて、テーブルの尻を濡らした。
「いやだ。冷たい。気をつけてくださいね」
テーブル女はそう俺を叱った。
すいません、と謝る俺を彼女は笑った。そしてこう言った。
「いいのよ。そんなに恐縮しなくても。ところでおつまみにチョコレートは要らない？」
いただきます。というと、手をお尻のほうに当てておいて。と言ってきた。
言われたとおりにする。彼女の頬が少し赤らんで、下復に力を入れているのがわかった。手元を見ると、彼女の尻の穴から茶色い固形物がひねり出てくるところだった。手をどけようか迷ったが、諦めてその固形物を受け止める。
ひんやりとしたチョコレートの感触。
「どうぞ。おいしいわよ。アーモンド入りが良かったら、そう言ってね」
匂いを嗅いだらチョコレートの香ばしい匂いがした。
味も申し分ない。苦味の効いたビターチョコだった。
そうだ。話ができるのならちょうどいい。

「実は俺、３０５号室に泊まってるんだけど、部屋がわからなくなっちゃんたんだよ。キミ、わかるかなあ」
少しなれなれしかったかなと思ったが、テーブルと話すのは初めてだから仕方が無い。テーブルに向かって敬語を使うのはもっと滑稽だろう。
「あたしはこの店から出たこと無いからわかんないわ」
テーブル女は困った表情をして言った。
眉をしかめたその表情に俺の胸は静かにときめいた。
俺は彼女の突き出た尻をなでながら困ってしまった。部屋に戻れないとまずい事になる。何がまずいのか、朦朧とした意識は具体的に教えてくれないが、とにかくまずい。
俺のそんな苦境に気付いたのか、テーブル女はこう言ってくれた。
「あたしも探すの手伝おうか。一人でさまようよりは二人の方が心強いでしょ」
なんて優しいテーブルなんだろう。
「キミ、名前はなんていうの」
「テーブルに名前なんか無いわ」
期待はしてなかったが、やはり名無しのテーブル女だ。
「名前が無いと、呼ぶ時に不便だ。何か無いかな」
焦る俺に彼女は、じゃあ、テーブルのテルって呼んで、と言ってくれた。

「それじゃあ、上のガラス台を外してくれる？」
テルの背中に張り付いている硬質ガラス板のことだ。
「あたしの左の乳首がそのロックスイッチになってるの」
俺は恥ずかしい期待感をもって左手を下げると、テルの乳首をつまんだ。硬くてコリッとした感触だった。軽くひねると、ロックが外れる音がした。
「じゃあ、テーブルの上のものを落とさないように注意して外してね」
言われたとおりに、ジョッキや皿などを椅子の上に移し変える。
「あ、ちょっと待って」
さて、ガラスの台を取り除こうとした時、テルが小声で言った。

怪訝に思っている俺の前を、ウエイトレスが静かに横切っていった。
「いいわよ。今よ」
やはり脱走する所を見つかるのはまずいのだろう。
俺もあたりをうかがいながら、用心深く台を外してやった。
テルの滑らかな背中が、俺の目の前にじかに現れた。
肌色の磁器のように滑らかな肌はしみ一つなく人間離れしているが、撫でてみると確かに弾力があり、人間とまったく変わりなかった。
テルが立ち上がった。
豊かな胸が現れた。ゆっさりとゆるく揺れる胸に俺の目は吸い寄せられる。下を見ると、短い陰毛がまばらに生えていた。
俺は思わず目をそらした。恥ずかしかった。
テーブル相手に自分が興奮するのがわかったからだ。情けないと言うか、なんと言うか……。
全裸でにっこり笑うテルは俺の顎くらいの身長だ。
女性としても小柄な方だった。
「キミ、恥ずかしくないのかい」
俺はうつむいたまま言った。
「別に。テーブルには羞恥心なんて無いもの」
確かにそうかもしれない。
「じゃあ、今のうちに脱走しよう」
テルが俺の手を引いて言った。
衝立や観葉植物の陰に隠れながら、俺達は出口に向かう。
レジの所に一人従業員がいたから、俺とテルはかがんでよつんばいになってドアの所まで進んだ。
そして一瞬の隙を突いてドアを抜けて出た。
あ、お客さんという声が聞こえたので、思い切り二人で走った。
いくつかの丘を越えて、林を抜けると、追手の気配はすでに消えていた。
俺達は二人で大声で笑いあった。
ちょうど、川のほとりだった。
大きな川だ。向こう岸まで５０メートルはあるようだ。

「走ったら汗かいたね。あそこに露天風呂があるから入りましょう」
テルが指差す方向には、目隠しの壁一つ無い素堀の温泉があった。
湯気と硫黄の匂いがあたりに立ち込めている。石段を降りて、テルの手を引きながら俺はその場所に向かって歩いた。誰もいない。川の流れる音が延々と続いているだけで、その他には何も音がしなかった。
服を脱いで湯船に浸かった。
テルもすぐに俺の横に並んで浸かった。テルが体を寄せてくる。この娘が人間だったら、どんなにいいだろう。もしそうなら押し倒してすぐにでも思いを遂げるのに。
「なに見てるんですか？」
テルの目がまっすぐ俺を見つめている。俺は自分の駄目さに嫌悪感を持ちながら目をそらした。テーブルを好きになってしまうなんてどうかしてる。
「キミがあまりかわいいからだよ」
俺はそっぽを向きながらそれだけ言った。
「嬉しい。かわいいなんて言われたの初めてです」
テルは俺の胸に頬をつけて抱きついてきた。自分の股間が膨らむのを俺は感じた。
「あ、元気ですね」
テルは恥ずかしげも無く俺のそれを握った。そのまま俺の唇に自分の唇を合わせてくる。
テルの舌はとても滑らかで熱かった。
絡まりあう二つの軟体動物はお互いの消化液で解けて一つになるようだった。
ぬるめの湯の中で、川音を聞きながら俺達は抱き合い、汗だくになった。星の光がいつしか消えて、あたりは街灯の光に薄ぼんやり照らされるさびしい風景に変わった。
風が冷たくなったかと思うと、いきなり雨が降ってきた。
二人の火照った体に冷たい水滴がしぶきを当ててあたり、跳ね返る。

思いを遂げた事と、冷たい雨のせいで俺は忘れていた事を思い出した。
「そうだ。部屋に帰らないといけないんだった」
「でも、どの旅館だったかしら」
テルが言うとおりだ。丘を越え、林を抜けて逃げてくる間に旅館からも飛び出してしまっていたのだ。
「とにかく行こう」
俺は浴衣を着ようと手を伸ばしたが、そこには俺の浴衣は無かった。
雨で増水した川の流れに流されてしまったのだった。
仕方なく裸のままその露天風呂を後にした。
タオル一つないのではまったく格好がつかない。ぶらぶらしたものを手で隠すのも滑稽だし、そのままにしてるのも変だ。
テルがまったく全裸を恥じてないのに見習って、俺も堂々としていようと思うが、歩いているうちに背中が丸く猫背になってしまう。
雨の降る暗い温泉街をテルと手をつないで歩いた。
見覚えのある宿は無かった。
両脇に温泉旅館の並ぶ通りを二人で歩いていると、きゃ、嫌だ、とか、あれ、変態じゃーんとか周囲で声が聞こえていた。
非現実的なシーンの連続なのに、そんな所だけは妙にリアリティがある。
笑い声や冷やかしの声の渦巻く中で、俺は塩をかけられたナメクジみたいに、解けてなくなりそうなほど萎縮してしまう。テルは、というとそんな周囲の声にも動じることなく自分達の出てきた旅館を懸命に探していた。
「すいません。この辺に綿屋別館っていう旅館があるはずなんですが、知りませんか？」
浴衣を来た3人づれの温泉客にテルが尋ねた。
彼らは無遠慮な視線で全裸の俺達をながめる。
特にテルの下半身をニヤニヤしながら執拗に見ている。

テルはそれでも全然恥じらいを見せずに、堂々と彼らの視線にその豊満な乳房や若草のような陰毛をさらしていた。
「テーブルにしてはずいぶん色っぽい子だなあ。俺達がかわいがってやるよ。そんなダサい男、放っておいてこっちにきなよ」
色黒の毛深い腕をした男が、テルの右腕をつかんで引き寄せた。
止めろ、といって止めに入る俺に、別の男が足を引っかけて来た。
濡れたアスファルトに俺は転がった。
笑い声がして、靴底が俺の体に叩き込まれる。
止めて止めて、と悲しげなテルの声が聞こえる。
俺の全身を流れる血液の温度が3度くらい瞬間的に上がったような気がした。

全裸である事で引け目を感じていたが、本気を出してやろうじゃないか。俺はこれでも喧嘩には自信があったのだ。
脱力する振りをして敵を油断させたあと、俺は一番近くにいた男の足首をつかんだ。そして思い切り引くと、その男はバランスを崩して倒れこむ。
ジャンプして男の腹に右足を叩き込んでやった。
あとはまるでカンフー映画でも演じているみたいだった。
喧嘩に明け暮れていた高校時代でもここまで自在に動けていなかっただろう。
そう思えるくらいに華麗な俺の蹴りと鉄拳は、三人の前歯と肋骨を叩き折り、悲鳴と供に雨の中に消し去るまでにほんの１０分も要しなかった。
「こら！　なにやってるんだ」
遠くの方で叫び声がしたかと思うと、ピリピリ笛の音が聞こえてくる。
警察がやってきたようだ。誰が電話したにせよ、喧嘩を見てから電話したにしては早すぎる。きっと露出狂の男女が歩いてますというようなチクリの電話だったんだろう。
「逃げよう！」「うん！」

見事に息の合った俺達は、警察が来るのとは逆のほうに大通りを走り、すぐに直角に入っていく路地に滑り込んだ。狭い裏通りはごみバケツや空き缶入れが乱雑におかれている。それらに引っかかったりつまづいたりしながら、冷たい雨の中走った。テルはいいけど。俺はぶらぶらする物が合ってとっても走りにくい。
時折太腿に当たって苦しくなる事まであった。

それから何年もの時間が過ぎてるような気もするし、まだあの部屋で酔っ払ってうたた寝してるだけのような気もする。
テルと俺は何度も愛しあい、温泉街をさまよううちにお互いに離れられない唯一無二の関係になった。裸で人前を歩く事にも何の感情も持たなくなり、そんな俺たちを見た人々の方が逆に羞恥に顔を赤らめるありさまだ。
これは夢ではないかと何度か思い、そうでありませんようにと、さらに何度も思った。何かの拍子に倒れた俺が脳内出血かなんかで意識不明の重態になってることもあるかもしれない。
だけど現実なんてどうでもいい。考えてみれば今時分が夢を見てるのではないと証明できる人間などどこにもいないのだ。
テルと二人でいる今この時こそが俺にとって最も大切な時間なのだ。
「今日はどうする？」
テルが聞いてきた。
「久しぶりにミルクがのみたくなったな、何だか空腹なんだ」
俺が言うと、テルは頷いて大き目の乳房を俺の顔の前に持ってきた。
その乳首を吸うと、よく冷えたミルクが俺の口を満たし、喉を通り過ぎて胃に収まっていった。
テルの弾力にとんだ乳房をもむとさらに勢いを増してミルクがほとばしる。
裸で公園に寝転ぶ二人の上をまぶしく煌く太陽は上り、そしてゆっくりと沈んでいった。

温泉街の放浪者　　おわり